

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<論文><うっしごころ> : 普遍につながる個 の文章 : 『紫式部日記』断章(二)

大谷, 裕昭 / オオタニ, ヒロアキ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

1993-12-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019695>

△うつしごころ▽——普遍につながる個の文章

——『紫式部日記』断章(二)——

大 谷 裕 昭

「秋のけはひ入り立つままに」——十年來の待望であった男子出産を目前にしての、おそらくは空前絶後とも言えよう盛儀に、今これから立ち会おうとしている記録者の目の高揚が、秋という季節の只中に入り込んでの「土御門殿のありさま」をつくり出し、主役たる中宮へと向かっていく。夕映えの視覚の美に昂ぶらせていった目はそのまま聴覚の美に心を澄ませ、高僧たちの読経の高低色々の音の莊嚴世界に、風にのりふうっと入りこんでくる遣水の流れの音を交ぜ加え、音のハーモニーの拡がりの浄土世界を現出させ、その中心に中宮彰子を据える、「敦平親王誕生の記」の冒頭は、そのような文章でつくられていき、女主人への讃仰の思いが、△うつし心▽との対比において見つめられ「かつはあやし」と「自分から離してつつましくゆるやかに表現」^(註)される。

一、「うつし心をばひきたがへ」——讃仰への文章

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめし

つつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし。

内なる苦を浄化させてのその美しさに、浄土世界の主を見る思い、生きるつらさもすべて浄化される思い、そういうはじめての内的体験がここには書かれている。そのはじめての思いを言い表すためのことばが「うつし心」ではないだろうか。従来あまりにも『源氏物語』作者紫式部論からの投影でこの「うつし心」の深読みがなされ過ぎてきていたようだが、「憂き世」にしても、取り立てて論じなければならぬほどのことばではなからう。ごくありふれた当時の思いなのではないか。「年の内はみな春ながら暮れなん花見てだにもうきよすぐさん」(『拾遺集』卷一・春・七五・読人知らず)など、歌にも詠み、人々のからだにも染みついていた思い、浄土への願いがその度合いをいっそう深めていった目と心の色合いであろう。ま

た、日常でのごくありふれた思いを生じさせたり、ものごとの理非曲直を判断したりといった、理性にあたることばが「うつし心」であり、例えば、恋や嫉妬などに「うつし心」をなくすなどと使われるように、ここでも「御前」の「御ありさま」にすっかり心奪われて、わが状態を「うつし心をばひきたがへ」と表現しているだけではないか。この「ひきたがふ」という語は、帚木巻を初出とし、動きを内包することばとして紫式部がつくり出したものかも知れない。目的語を伴わない副詞的用法として日常使われていたのを、物語の文章に選び取り、使い馴らし、さらに、わが心の表現に造語していったのかもしれない。心の冷静さが、「御前」の「御ありさま」の方へ引きこまれていってしまうわが心の動きをうつし取るうとの文章に紫式部は仕立てあげている。恍惚の境という初体験を、驚きをもって首をか上げつつそれも、「作中場面で自分自身を静かにみつめているのを直接に記している」^(注)それが「たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし」であろう。

すでに小谷野純一氏^(注)が詳細に論じ、「『うつし心』が自己の存在する現実に対して、『憂き世』と規定し、妄執する平生の心の様を、彼女自身の納得の次元に於いて総括した義」と結論づけたり、山本利達氏が「この世を憂きものと思う心であらう」と簡潔にまとめているあたりが妥当な解釈と思う。また小谷野氏は、「行幸ちかくなりぬとて」の条での『思ひかけたりし心』が『うつし心』の内実を明示している」とも述べているが、「思ひかけたりし心のひく、かたのみ強くて」との言い方に端的なごとく、「めでたきこと、おもしろきことを見聞」きその対象に魅きつけられている式部の心をふつと日ごろの私の心の状態に戻らせてしまう働きをもそれはする。心

の状態でありまた働きでもある。それが「うつし心」のようだ。宮仕え女房のあるべき姿に照らし合わせて、「当該の『うつし心』が客観的には、極めて特殊、異常である」と小谷野氏は言われるが、働きにおいて式部の「うつし心」が人一倍だということであり、歌や物語づくりの中で研ぎすましてきてしまっていた自己凝視、自己意識のつよさということであろう。

「うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし」というのも、その人一倍つよい「うつし心」にも引き戻されひき籠められてしまうことのないほどの中宮のすばらしさを不思議の感をもって讚え、例えば、「翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみにけり」と語られているかぐや姫ともまがうほどのかがやく中宮が、式部のいわば複眼をとおして遠近感をもってうつし出されていく。清少納言の定子賛美が、その言動へのひたすらなる吸引であるのに対し、動を内に秘めての静なる神聖さとして彫り上げていく、そこに魅かれる自分の心をいぶかりつつもその「うつし心」を無化させてしまう吸引力として、聖なる姿が、距離をとっての確かな存在性を獲得していく。

それにしても、その只中において自己を見る自己が尖鋭に意識化され、それを文章につくり出してみせたのは、式部がはじめてであろう。例えば、『蜻蛉日記中巻』天禄元年三月の条にも、自己を見る自己に似た言い方は見られるが、文章の質は違うようだ。内裏の賭弓の試楽で道綱の舞に人々が感じ入ったり、その当日は帝から御衣を賜り兼家も面目をほどこし、道綱を送ってわざわざ家まで来てくれる、その時の喜びを次のように書き記す。「……など言ひて、

帰られぬれば、常はゆかぬこちも、あはれに嬉しうおぼゆることかぎりなし。」(十二日の試案)「……憂き身かとおおぼえず、嬉しきことはものに似ず。」(十五日当日)「その夜も、のちの二三日まで、知りと知りたる人、法師にいたるまで、若君の御よろこびきこえにきこえにと、おこせ言ふを聞くにも、あやしきまで嬉し。」兼家との仲をふりかえり整序しつつ語る自分が、その時の嬉しさ、作中での有頂天に喜ぶ自分を、見つめて書いていく、いわば語りの構造としての見る自分であろう。前後の記事との整序の意識がつくり出した文章構造ではあるが、表現史の上から注目してもよからう。

二、「思ひかけたりし心のひくかた」——憂愁への文章

ところで河内山清彦氏の首部欠佚説を批判するにあたって益田勝実氏は、「全体の文章のカタチを導き出すカタは、まだ出来て」いず、かなぶみは「カタなしのカタチ作りの段階」と規定され、「『慶賀と贊嘆の念をもってつぶさに記録すること』と、『あわせて「身のうへの憂へ」さえ吐露したかった』ということが、当時のかなぶみのカタチに同時に盛り込みうることだったか」と疑問を提示し、十一月の内裏還啓準備の御冊子作りのあとの、「若宮は、御ものがたりなどせさせたまふ。うちに、心もとなくおぼしめす、ことわりなりかし」を、△敦成親王誕生の記▽の結びとされ、「そのあとの式部里居の憂悶の部分は、もうひとつの別の文章、△寛弘五年冬の宮仕えの記▽ともいふべき、時間的にはつづくが、性格を異にする文章の方に含まれる。」と明確に裁断された。「敦成親王誕生の記」の中で、この「うつし心」とともに「身のうへの憂へ」として

しばしば取り上げられてきた、行幸を前にしての憂愁の文章も、山本利達氏の「作者の目と心を位置づけると共に、中宮や儀式の立派さを引き立てる役割をもったもの」とのとらえ方や、「中宮の世界のめでたさは、それを述べる作者の立場が異なったところにあることを一言附加されることによって相対化され、また作者の世界はここでは明示されなくても、中宮の世界のめでたさに対置されることによって、確固とした質量をもってくるのである」との増田繁夫氏の論などは、バランスのとれた読みのように思う。ただ、いずれも、『紫式部日記』全体を一貫した文章としてとらえようとされておられ、山本氏の場合は、「讚美されるものに與行きを与える働き」として「作者の暗い心の動き」を見ようとされ、増田氏は、「二面性といふか、矛盾した二つの傾向」「対立した二つの側面をつつみこんだあり方を見」ておられる。行幸を前にしての文章を検討する前に、すぐあとの小少将の君との消息のかわしあいの場面を見ることにする。

小少将の君の、文おこせたまへる返りごと書くに、時雨のさとかきくれば、使もいそぐ。「また空のけしきもうちさわぎてなむ」とて、腰折れたることや書きませたりけむ。暗うなりにたるに、たちかへり、いたうかすめたる濃染紙に、
雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なるらむ
書きつらむこともおぼえず、

ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞかわくまもなき里下りしている小少将の君から文があり、その返事を書いたところ、折り返し小少将の君からまた文が届いたというのであり、時雨の闇夜の文使いにとっては難儀このうえない仕事だが、それにして

も紫式部は、どうしてはじめの二人かわしあった文をこの入敦成親王誕生の記に書きとめておかなかったのか。憂き世のつらさ宮仕えの憂きことなどが、「父君よりことはじまりて」「幸いのこよなくおくれたまへる」小少将の文にはあり、それを、同じ思いで生きていく心として慰め、生きるはりと出仕する気を生じさせるような返りごとを紫式部は書いて送ったのかもしれない。その式部の消息に心の通いを感じとり気を取りもどし、まるで恋人にでも訴えるようなつらさくらべの歌合戦を挑みかけるというたわぶれ心で式部への思いを歌に仕立てあげてみせた、それが「雲間なく」の歌であろう。心の「雲間」もなくじっともの思いに沈み「空」をながめやる、それが「空」までも一面に曇らせてと、「空」をも激変させてしまうその声調にのせてもの思いの長さ深さ激しさを表出し、その「空」に大きく向けられていた心が、「かきくらし」の小休止で次第に内に沈んでいき、内への問いかけとして下句が呟やかれていく、じっと心中にこらえ耐えている相手への思いの圧の声調として。思慕しじっとこらえているその思いの表われとして「時雨」に目が向けられ、わが心の肌寒さ暗さ涙のイメージをそこに見ている。思いの深さ大きさ激しさを声調にのせつつ、「雲間なく」き「空もかきくらし」「時雨」ているがそれは私の「しのぶる」思いの涙なのですと大仰に詠んでみせる。「神無月しぐれとのみやおもふらむあまつそらにてわぶるなみだを」(『西宮左大臣集』41)「思ひやる心の空になりぬれば今朝はしぐると見ゆるなるらむ」(『蜻蛉日記』上・天曆八年・兼家の歌)「おほかたにさみだるゝと思ふらん君恋ひわたる今日のながめを」(『和泉式部日記』師宮の歌)など、「男」の発想に身をのせ、式部に歌いかけていく。そのことば遊びをとお

して式部への思いを熱く伝えようとしている。式部に慰められての小少将のはずみがうかがえる。

式部の返歌もおもしろい。小少将の歌の主意となっていて下句のキーワードを上句でまず打ち返し弱め、次に相手の上句のキーワードに、自分のそれを対置させる形で下句を形成していき、相手の思いより、自分のそれがどれほど深くつよいかを証明してみせる。つらさをくらべる、そのくらべ方のおもしろさ。——ことばによる証明の仕方のおもしろさに主眼をおいての歌で式部も小少将にたわぶれてみせる。知的戯れとしての歌でその段を閉じ、行幸当日の盛大さを写しとる文章へと入っていく。

「書きつらむこともおぼえず」というのは嘘で、はじめの二人の文は、ここに書きとめるには異質な心として排除したのではないだろうか。「操作の文体^註」をつくりあげてきた紫式部は、前後との異和をそのまま一文に仕立てあげてきたことをしなかつたのであろう。例えば、「殿上人のひたおもてにさし向か」うこととか、内裏女房との車きしろいなど、宮仕え世界での人とかかわりから生じる「憂さ」は、この「敦成親王誕生の記」にとって異質な感情として紫式部は排除しており、小少将の君からのはじめの「文」をあえて省き、自分の返事についても「腰折れたることや書きませたりけむ」「書きつらむこともおぼえず」と中味そのものはあいまいにし、折からの時雨に「使もいそ」ぎ、忽卒の間のこととの前書き「また空のけしきもうちさわざてなむ」のみを記録する。行幸を前にしてのもの思いの文章も、少なくとも宮仕え世界そのものへの「憂き」思いを書き表したのではないだろう。「うつつ心」の働きとしての自己意識・自己の異質性意識の一表現と見てよいのではないか。

行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくろひみがか
せたまふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。
いろいろうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざま
に植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老い
もしぞきぬべきこちするに、なぞや。まして、思ふことの少
しもなのめなる身ならましかば、すぎずきしくもてなし、若
やぎて、つねなき世をも過ぐしてまし。めでたきこと、おもし
ろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくか
たのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさる
ぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほもの忘れしなむ、思ふか
ひもなし、罪も深かなりなど、明けたてばうちながめて、水鳥
どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世を過ぐしつ
つ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど身はいと苦しかな
りと、思ひよそへらる。

逸品揃いの、白菊の移ろいの色色、濃淡さまざまの盛りの黄——
色・形の千変万化の視覚美、それを朝方のひんやりとした風に動い
ている「朝霧」に、うっすらと隠れたり、とぎれたりといった、
「朝霧」の動きにより見えかくれする変化の美として場面化し、「げ
に老いもしぞきぬべきこち」と、その美しさに感動し心も洗われ
る、まさに仙界現出の思いの只中に自己を置いてみせる、しかし、
そこにさえ融けこみ安住しえぬ自己、そこから自己を引き離しうっ
つであるほかない意識がふっと入りこみ心を領してしまふ。「思ふ」
中味には少しも言及されていない。むしろ、そのことに注目すべき

であろう。「思ふかひもなし、罪も深かなり」との自己批評のこと
ばが、その「思ふ」内実を間接的に照らし出してはいようが。浄土
への欣求と一体のこの世を憂きものと思ふ状態としての「うつし心」
とは違うようだ。いや、冒頭部での「うつし心」もそれほど中味が
明示されてはいず、それがさまざまな論議のもととなっていたとも
言えよう。憂き思いなどを契機として目覚まされ、次第に深淵化さ
れていき、鋭敏になつてもいる意識、仏の教理や浄行をとおしても
解消されることのない、意識の働き、例えば、遠離すべき三種のひ
とつ、「智慧門」に依る遠離の対象「我心の、自身に貧著すること」
のごとき心の働きを「思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて」と
言っているのではないだろうか。誰しもが心に秘めている。しかし、
自分の「なのめ」でなく、「ひくかたのみ強」い。そういううつら
さへの自問自答の心の時間が、ここには書きとめられているのでは
ないか。中宮聖化のペースペクティヴとしてあった冒頭部の「うつ
し心」とは、一見逆方向の働きに見え、それだけ中宮の魅きつける
力の比類のなさの表現にもなっていたが、しかし、大体においては、
とめどもなく働いていってしまう。「朝霧」の時から「明けたてば」
までのいつとことのない心の流れ、自己意識のブラックホール
にひきずりこまれてから、脱出までの無時間の時間としてここには
じめて記録されている。

「思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すぎずきしくも
もてなし、若やぎて、つねなき世をも過ぐしてまし」と並みの身を
仮想することで、人一倍「思ふこと」の強い自分のつらさを述べ立
てていくが、「雪消えて花さへちりぬかくしつとつねなき世をやた
だにすぐさん」^(註10)などと詠まれてもいるように、「常なき世」を「す

きずきしくももてなし、若やぎて」「過ぐ」すありよう自体が反実、
仮想であり、「憂き世」意識同様「常なき世」意識も時代の目と心
として誰しもが身にしみつかせていた普遍的思いと言えよう。ただ
「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても」我に帰って
しまう、その度合が人一倍だということであり、「思ひかけたりし
心」——いつのころからかそのことを思うようになってしまった
た心、いわば自己の異質性意識とでもいうような心の働きの生じて
しまつて以来、「めでたきこと、おもしろきことを見聞く」その只
中にふつとつ、つに引き戻されてしまう、そういう心の経緯を紫式
部ははじめて文章にしてみせてくれたのではないか。

「情動思念の発し動きゆくかたちが、客観的な環境とそれに相対
応する精神作用の総体的な過程として、表現の世界にたたきこまれ
ている」^(註)との秋山虔氏のすぐれた読みも、「それ自体の論理をもつ
て客観的に展開する文章表現の世界」とまでは言えず、野村精一氏
の「作者は自ら目に見えぬ内面自身が語ることを外界へ投げ出し
ながら、わずかに間投詞(「なぞや」「いかで」など)反実仮想挿入
句(「……ましかば……まし」)などの形式をかりて、一の文章に
仕立てたにすぎない」^(註)との文体論的批判は当たっている。自己意
識の働きへの目としての「なぞや」のほかは、「心理的に連接させ
られている」とも言えないかも知れず、やがて、「いかで、いまは
なほもの忘れしなむ」と、自分に気合いをこめて言いきかせたりし
て、中味を明示せず展叙してきた内面からの脱出をはかっていく。
それは、個でありつつ普遍でもある心の働きの表現の対象に据え、
はじめから出口を予定しての内部への潜行纏綿の文章であるからで
あろう。

「なげかしきことのまさる」でこの文を閉じず、「もう一つ言葉
をつづけて『……ぞ、いとくるしき』でこの文を結ぶ」ことで
『なげかしき』に圧せられたるかに見えた現在の幸福感(引用者注
「老いもしぞきぬべき心地する」)は、これで『なげかしき』と等し
い重さで平衡をとりもどす「操作の効果」を渡辺実氏は読みとら
れているが、そういう「操作」を可能にさせたり、また、根来司氏
の言われる「散文精神」——「彼女がその心内を『ひどく苦しい』
と投げ出しているのでは決してな^(註)く、つまりは「なげかしきこと
のまさる」ままにまかせず、そういう自分を「いと苦しき」と、
「作中場面で」「静かにみつめているのを直接に記している」とい
ことであろうが、そういう「話手自身が第二の自己を設定すること
によって第一の自己を見つめる姿勢」というのも、出口へ向かう文
章が次に用意されているその過程においてであり、「思ふこと」の
中味に言及せぬ積極的意味とあいまって、普遍的な心の働きのほじ
めての式部独自の表現として読むにとどめておくのがよいのではな
いか。さらに言えば、「いと苦しき」と対象化したうえで、一呼吸
おいて、「いかで」と自分への疑問をひびかせつつ願望決意のもと
に、「いまは」と出口に向かう文章を可能にさせているのは、「水鳥
を」の歌世界の普遍が目ざされ全体の文章が組み立てられているか
らであり、小少将の君とのはじめの贈答歌を排除したのと同じ文章
構成上の配慮のもとに、この文章も書かれていると言えまいか。
「思ふかひもなし、罪も深かなり」と自己執着の罪という仏教教
理を持ち出すことで一応ふつ切り、現実世界へ戻ってき、「明けた
れば」自己執着を離れようと外を「うちながめ、水鳥ども」の姿に
自分を重ねて見る。「わが深刻な内面性を対象化することによって

自己をそこから脱出させるための媒介として、池の面にあそぶ水鳥が歌に射止められ」「ひとつのイメージとして定着し」個別としての自己の異質性意識は普遍化される。個は依然個としてうつつでありつづけるほかないが、しかし、普遍の中の個として位置づけられ、宮廷貴族社会の盛儀を担う個の普遍的ありようとして文章化され、事実の記録ではない、紫式部の目と心による「敦成親王誕生の記」のめでたき記録の一文章となりえたと言えよう。

たしかに、冒頭部での「うつつし心」と異なり、憂愁の色合いはある。しかし、そのもの思いの中味はついに明かされることなく、少将との最初の贈答の文も書きとめられず、行幸当日の晴れの文章へと矛盾なくつづいていく、そういう文章の方向性がここにはある。益田勝実氏が「寛弘五年冬の宮仕えの記」と名づけられたその冒頭を飾る里居の文章——例えば、土御門邸の最高に豪華華麗な美にいつのまにか浸透されてしまった感性が、「ふるさと」に異和を覚えるといった、わが感性の変貌にふつと気づき、それを挺に、気づかぬうちに変貌していく自分のありよう全体を出仕以前の過去から洗い直し、自己を追い込み、現世での心の安住の場の喪失へと追いつめ、ついに普遍への出口を失った「古代のへ心の都市人」をつくり出していく、その文章の方向性の、個へ限りなく下降していく「憂愁」とは、質的に異なるものがある。

ひとが人である本質的心の働きといってもよい自己意識、他から自己を引き離す心の働き、強弱の差はあれ誰しもが有するそれ自身普遍的でありつつ個の心の働きである自己の異質性意識、聖なる中宮に魅せられたり、「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても」そこからふつと引き離される心の働き、それを式部は、

「うつつし心」とか「思ひかけたりし心」と命名することで、自己意識をはじめて表現の対象に据えることができ、そういう内面をかかえて人々が生きている世界として、紫式部は、土御門邸での盛儀を記録しようとし、自分の目と心による「敦成親王誕生の記」を綴ることができたのであろう。「枕草子」の「見られる」恥と苦痛を代償にしてのことが、たとえ宮仕えでの「見られる」恥と苦痛を代償にしてのこととはいえ、清少納言の資質としての上昇感性によるあらましひと重の世界であるのに対し、紫式部は、誕生前後の宮仕え世界の美を見、讚える心と、矛盾なく並存しうる個の心の働き——その盛儀を支え賛嘆する心の、普遍へつながる個として二重に構造化し、道長家栄華の記に奉仕させようとしたのであろう。

『紫式部日記』『竹取物語』は、新潮古典集成、勅撰集・私家集は、新編国歌大観、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』は、小学館日本古典文学全集による。

(註1) 根来司氏『平安女流文学の文章の研究』「紫式部日記の文章(二)」

(註2) 『紫式部日記』に於ける『うつつし心』についての検討

(『中古文学』第十号)

(註3) 新潮古典集成頭注

(註4) 自己を見る目というのは、平安朝和歌世界がつくり出してきたものようだ。例えば、業平の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身に」この歌について以前次のように書いたことがある。「女との間を引

き裂かれた男の心の惑乱が、そのままほとばしり、「月やあらぬ」と訴えてはとぎれる。月が昔のままかどうかといった判断は、そこにはない。月に向かつての男の悲嘆の表出として、意味不明の短いことばが投げ出される。次いで、「春やむかしの春」と、女と逢いつづけていたころのことが噴き上げてくる。しかし、それは「むかし」今も春だが、女はいない。春は昔のままの春だが、今は女もおらず、月も春も昔のままでありながら、昔のままでない状況への痛みが、「春やむかしの春」と高揚させいった女への「孤悲」の情をつまづかせ、「ならぬ」とうち沈んでいく。

わが身を内省しての下の句は、「消え入るようなかさけさ」において眩かれる。ひとりとり残されたわが身。「わが身ひとつ」には、そういう無残なうづきがある。女のない今も「わが身ひとつはもとの身」女との別離がわが身のおわりとはならず、依然生きつづけていることへのうづきが、「して」という、止むことのない眩きとなる。惑乱の心の奔出、回想の痛み、わが身の不条理へのうづきといった男の内部のドラマが、そのまま業平のことばとなっておりふれてくる。意味的統一はもとより、「ことば」により「ところ」がとらえかえされるといった、統御方向さえ拒もうとしているかのようだ。彼の内部にわかかえるドラマの奔流が、「ことば」を求めてあえぐ。「その心あまりて、ことばたら」ざる代表的名歌とってよかろう。「業平が見てしまったもの、内部のドラマが「ことば」を求めてぶつかりあえぐなかで業平の心に衝撃を与えたもの——「わ

が身ひとつはもとの身」ドラマの終焉がわが身の閉幕にならぬことへの痛み、臆面もなく生きつづけているわが身、死ねないためにだけ生き身を晒しておらねばならぬ、どこにも救いのないぎりぎりの自分を見すえての業平の心」『古今集歌形成についての覚え書』——『東京都立葛飾野高等学校研究紀要』一九七二年）恋ひの訴えの只中に、ふつと見いだされてしまった「わが身」——依然生きつづければならぬ生身の自己への痛み、目、そのようなものとして独白述懐の歌のことばが目を聞かせ、鋭敏に磨きすませてきた自己への感性、それが日記の文章での自己を見る目を養い育ててきたのではないだろうか。

(註5) 「かなぶみに型がなかった頃——『紫式部日記』作者の表現の模索——」(『国語と国文学』一九八四年五月)

(註6) 新潮古典集成解説

(註7) 「紫式部論——『紫式部日記』のザインとゾルン——」

(『論集 日本文学・日本語 2 中古』)

(註8) 渡辺実氏『平安朝文章史』第九節 操作主体——紫式部日記

(註9) 『往生要集』巻中「大文 第五助念の方法 第四 止悪修善」(岩波日本思想体系)

(註10) 『公任集』・三五四

(註11) 『源氏物語の世界』第二 紫式部の思考と文体 (二)

(註12) 『源氏物語文体論序説』4 紫式部の文体——紫式部

日記について——

(註13) 益田勝実氏「日記と記録——紫式部日記をめぐる——」

『国文学』一九六九年五月)

(註14) 三田村雅子「枕草子の視線構造——見る／見られる／見せる」(『日本文学史を読む』——⑩古代後期)

(註15) 例えば『蜻蛉日記』上巻後半、康保三年五月から九月にかけての暗い記事、兼家への憤ろしき思いや激しいさかいの果ての途絶えと嘆きと独白述懐歌「絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水は水草ゐにけり」を頂点として、稲荷・賀茂へのもの詣でにつづく四つの文章群などは、その前後の明るくはずむ心との異質性を際立たせており、カタチ作りの模索のあと、極言すれば文章構成としての未熟さをさらしているとも言えまいか。(「世の中の人のやうならぬ」兼家との状態から、「乗物なきほどに、はひ渡るほど」のところに住まわせてくれた場面への、上昇方向での全体としての整序の流れの中に位置づけられてはいるが)日記の文章のそういう試行錯誤を見すえるなかからも、 \wedge 敦成親王誕生の記 \vee は書かれているのではないだろうか。

(おおたに ひろあき・文学部講師)

……93 委員研修旅行報告記……

去る十月三十一日に、93年度秋の委員研修旅行が開催されました。今回は、今年三月に開館したばかりの話題の江戸東京博物館に行つて参りました。少し冷たい風が吹きながらも好天気にも恵まれ、諸先生方をはじめ三五名の団体となりました。

企画された方々の御尽力もあり、その日は燻蒸室等の博物館の舞台まで見学することができました。

常設展示室への入口は大きな \wedge 日本橋 \vee で北側半分(約25m)を復元したものだそうですが、仲々圧巻でした。

江戸ゾーンは比較的、模型の展示物が多かったようです。中でも江戸時代の代表的な芝居小屋 \wedge 中村座 \vee 、市川團十郎が展示指導をしたという「助六」の舞台はとて華やかでした。模型以外の展示物は説明が少ないのが気になりましたが、その中で \wedge 錦絵 \vee の製作過程を展示したものは美しい上に理解しやすいものでした。

東京ゾーンでは模型もさることながら、震災・空襲による二度の被害を展示したものが印象に残りました。溶けた硬貨の集塊、折れた電柱、曲った鉄、そこからは模型にはない迫力が伝わってきます。また一昔前の電化製品の陳列には、珍しそうに眼を見張る子供達としきりに懐しむお年寄りとがいました。確実に時代は変化しているということでしょうか。

歩き疲れた後は、両国ならではのちゃんこ料理屋での食事会です。鍋を囲んでの語らいはとても楽しいものでした。深まる秋の中、文化に食欲に有意義な一日を過ごすことができました。

(梅澤 亜由美・大学院修士課程二年)